

中世

12世紀から13世紀にかけて、ヨーロッパで封建社会が転機を迎えた。

11世紀末から始まった十字軍の活動は、ローマ教皇の権威を高めたものの、封建社会を支えていた騎士階級の没落をうながした。その一方、十字軍の輸送によりイタリア諸都市をはじめ各地の都市で商工業者の活動が盛んになった。

こうした都市の活況を背景に、ルネサンスや宗教改革という精神面での封建社会からの解放が進められ、さらに新天地を求める大航海時代の幕開けとなり、ヨーロッパ文化圏の枠を一举に取り払う結果になった。このような動きと呼応して、国王権の伸張がはかられ、14世紀から15世紀にかけてイギリス・フランスという近代国家の母体が形成され、イベリア半島でもスペイン・ポルトガルが成立した。

中国では、宋の建国当初から北方民族がしだいに優勢となった。その力は遠く西方におよび、ヨーロッパからアジアにまたがる大帝国を建設した。13世紀にはモンゴル人が中国全土の支配を完成して国号を元としたが、元の支配は長くは続かず、約1世紀後には明により漢民族の支配が回復し、以後、江南の開発と商工業の発達がうながされた。

同じ頃、イスラーム帝国は王朝の分裂と交替を繰り返すうちにモンゴルの侵入を受けて崩壊した。一方で、イスラームとその文化は14～15世紀に中央アジアを支配下においたティムール朝と、16世紀にインドに建国されたムガル帝国を通して広まり、これらの地でイスラーム化が進んだ。

世界の情勢がこのように推移する中で、日本では11世紀後半から武士が成長し、院の権力(国王権)が伸長した。12世紀後半になると、武士による政権が生まれた。武士は各地で荘園・公領の支配権を貴族層から奪い、しだいに武家社会を確立させていった。

時代	1200	1250	1300	1350	1400	1450	1500	1550	1600
文化	平安	鎌倉	南北朝	室町	戦国	安土・桃山			
政治	(院政)	(鎌倉)	(南北朝)	(室町)	(守護領国)	(群雄割拠)			
主要事項	平氏滅亡 鎌倉幕府成立	承久の乱 英・マクナ・カルタ モンゴル統一	モンゴル襲来 鎌倉幕府滅亡 建武の新政 室町幕府成立	英・百年戦争 室町幕府成立 室町幕府滅亡	ローマ教会大分裂 南北朝合体 正長の徳政一揆	英・バラ戦争 応仁の乱 ルネサンス	コロンブス・アメリカ到達 マゼラン・世界周航 ルター・宗教改革 イエスス会成立 鉄砲伝来 キリスト教伝来	英・エリザベス一世即位 室町幕府滅亡 文禄・慶長の役	
世界	南宋 アッバース朝	高麗	元	百年戦争	朝鮮	明	オスマン帝国	ムガル帝国	

院政と武士の躍進

大陸で宋、朝鮮半島に高麗が建てられた頃、日本では地方で武士が成長し、荘園が各地に生まれ、中央で摂関政治が停滞して院政が始まった。院政はどのように成立したのだろうか。またその後、武士が台頭してくるきっかけは何だろうか。

1 院政の始まり

日本列島の大きな変化

① 荘園整理令は醍醐天皇の902(延喜2)年が最初(→p.69)で、その後1045(寛徳2)年にも新たに成立した荘園を停止するなどしばしば出されたが、整理令の実施は国司にゆだねられていたので不徹底であった。また、後三条天皇は荘園整理令を出すとともに^② 橋の大^③ 旨^④と称され、橋の基準として太閤検地(→p.143)まで用いられる一方、荘園では様々な^⑤ 橋が用いられた。

11世紀の後半、朝廷では政治の転換期を迎えた。天皇家や摂関家・大寺社は、諸国からの税収が不安定になる中、荘園の拡大をはかった。しかし、荘園の増加により、支配する公領(国衙領)を圧迫された国司は、荘園の不入の権利を取り消すなどの荘園整理をおこなったため、対立が深まった。

地方では豪族や開闢領主として力をのばしてきた武士の成長が著しく、貴族や大寺社と結びついて私領の拡大をはかった。なかでも東日本での反乱を機に、源氏の武士が奥州に勢力を広げた。九州では、大陸との交通が盛んになり、日宋貿易の窓口である博多の周辺には、大寺社や上級貴族が進出していった。

延久の荘園整理令と荘園公領制

関白の藤原頼通に皇位継承を抑えられてきた後三条天皇は、即位すると、ときの摂政・関白を外戚としないこともあって、新たな政治を進めた。天皇は摂関政治の弊害をみて成長してきたため、大江匡房らの学識にすぐれた人材を登用し、荘園の増加により公領が圧迫されているとして、1069(延久元)年に延久の荘園整理令を出した①。

天皇は整理の審査を地方の国司にゆだねず、中央に記録所(記録荘園券契所)を

記録荘園券契所の設置

コノ後三条位ノ御時……延久ノ記録所トテハジメテヲカレタリケルハ、諸国七道ノ所領ノ宣旨^①、官符^②、モナクテ公田ヲカスムル事、一天四海ノ巨害ナリトキコシメシツメテアリケルハ、スナハチ宇治殿ノ時、一ノ所ノ御領^③、御領トノミ云テ、庄園諸国ニミチテ受領ノツトメタヘガタシナド云ヲ、キコシメシモチタリケルニコソ。
(『愚管抄』)

① 宣旨・官符とも天皇の命令を受けて太政官から出される文書。② 横領する。③ ツメテは「詰めて」、ずっと聞いてきての意。④ 「一ノ所」とは「摂関家」のこと、摂関家領の意。⑤ 聞き入れ、用いられた。

設け、荘園の所有者から提出された証拠書類(券契)と国司の報告とをあわせて審査し、新しく立てられた荘園や書類不備の荘園など、基準にあわない荘園を停止した②。摂関家の荘園も例外ではなく、この整理令はかなりの成果を上げた。

5 荘園整理によって、貴族や寺社が支配する荘園と、公領との区別が明確になり、貴族や寺社は認められた荘園の整備を進め、国司は公領を郡・郷・保などの新たな単位に再編成し、支配下にある豪族や開発領主を、郡司・郷司・保司に任命して徴税を請け負わせた。

10 また、国司は田所・税所などの国衙の行政機構を整え、代官として派遣した目代の指揮のもとで在庁官人に実務をおこなわせた。

これに応じて在庁官人や郡司らは、武士として公領をみずからの領地のように管理し、荘園領主に寄進したため、かつての律令制度のもとで国・郡・里(郷)など上下の区分で構成されていたものが、荘園と公領(郡・郷・保)が並立する体制(荘園公領制)へと変化していった。

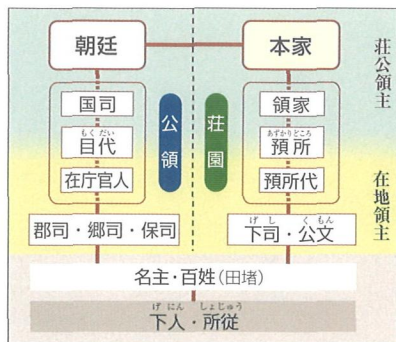
15 整備された荘園や公領では、耕地の大部分が名に編成されて負名(田堵)などの有力な農民に割り当てられ、田堵らは名の請負人としての立場から、しだいに権利を強めて名主と呼ばれるようになった。名主は、名を下人などの隷属農民や作人と呼ばれる農民などに耕作させながら、年貢・公事・夫役など③を領主におさめた。

院政の開始

11世紀半ば、陸奥北部では豪族安倍氏が国司と争う中で、源頼義が子の義家とともに東国の武士を率いて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏の助けを得て、安倍氏を滅ぼした(前九年合戦)。

25 その後、陸奥・出羽両国で大きな勢力を得た清原氏一族に内紛がおこり、陸奥守であった源義家が介入し、藤原(清原)清衡を助けて内紛を制圧した(後三年合戦)。

こうした武士の力に目をつけた白河天皇は、成長が著しい武士を登用し、父の後三条天皇にならって親政をおこなった。1086(応徳3)年に幼少の堀河天皇に位をゆずると、みずから上皇(院)④として院庁を開き、天皇を後見しながら政治の実権を握

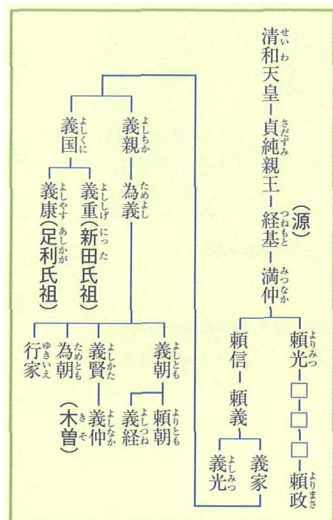


荘園公領制の仕組み

②石清水八幡宮領では、34カ所の荘園のうち21カ所だけが認められ、残りの13カ所の権利は停止された。

③名主はおもに米・絹布などでおさめる年貢のほか、糸・炭・野菜など手工業製品や特産物を納入する公事、労役を奉仕する夫役などを負担した。これは、国司が名を請け負った田堵に課税した官物・臨時雑役の系統を引くものである。

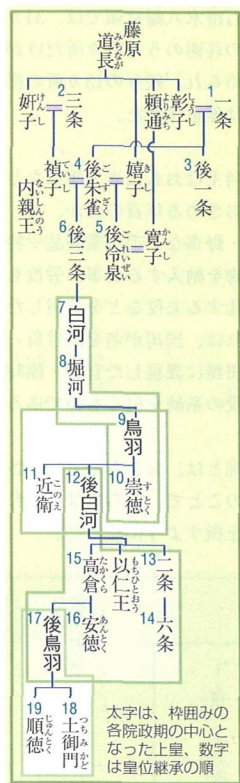
④院とは、もともと上皇の住居のことで、のちには上皇自身を指すようになった。



源氏略系図(1) (→p.95)



後三年合戦図 義家軍が金沢柵(秋田県)で雁の列の乱れをみて敵の伏兵を知り、これを攻めているところ。(『後三年合戦絵巻』、部分、東京国立博物館蔵)



院政関係系図

Q▶ 権力が摂関家から院へと移ったのはなぜだろうか。

読みといてみよう

史料の著者である右大臣藤原宗忠は、白河法皇の院政をどのようなものと考えているのだろうか。説明してみよう。

院政の開始

禪定法王(白河法皇)は、……後三条院崩後、天下の政をとること五十七年、在位十四年、位を意に任せ、法に拘らず、除目・叙位^①を行ひ給ふ。古今未だあらず……威四海に満ち天下帰服す、幼主三代の政をとり^②、斎王六人の親となる、桓武より以来、絶えて例なし。聖明の君、長久の主と謂ふべきなり。但し理非決断^③、賞罰分明^④、愛惡掲焉^⑤にして、貧富は顕然なり。男女の殊寵多きにより^⑥、已に天下の品秩破る、なり。

(中右記、原漢文)

①官位の人事。②堀河・鳥羽・崇徳天皇の時期の治世。③裁判をしつかりとおこなう。④賞と罰とはつきりとおこなう。⑤いづくしと憎しみとが著しい。⑥男女の近臣を優遇する。

院政の道を開いた。

白河上皇は人事権を握って、莊園整理の断行を歓迎する国司(受領)を支持勢力に取り込み、院の御所に北面の武士を組織し、源平の武士を側近にするなど院の権力を強化した。堀河天皇の死後には、幼い鳥羽天皇を位につけて本格的な院政を始めた。これに応じて、摂関家は、院と結びつくことで勢力を盛り返そうとつとめた。

院政は、自分の子孫に皇位を継承させようとしたところから始まったもので、院庁からくだされる文書である院庁下文や、院の命令を伝える院宣がしだいに国政一般に効力をもつようになった。院は法や慣例にこだわらずに政治の実権を専制的に行使するようになり、院政は白河上皇・鳥羽上皇・後白河上皇と100年余りも続いた。

譲位後に治天の君として院政を行えたのは、天皇の直系尊属(父・祖父など)に限られていた。

法勝寺 院の権威を象徴する法勝寺は焼け落ちてその都度再建されたが、南北朝時代に焼けてからは再建されなかった。(復元模型、京都府歴史資料館蔵)



上皇は仏教を厚く信仰し、出家して法皇となり、六勝寺^{ろくしょうじ}など多くの大寺院を造営し、堂塔・仏像をつくって盛大な法会をおこない、しばしば紀伊に熊野詣や高野詣を繰り返した。また、京都の郊外の白河や鳥羽に離宮を造営し、これらの費用を調達するために成功などの売位・売官の風潮が盛んになり、行政機構は変質していった。

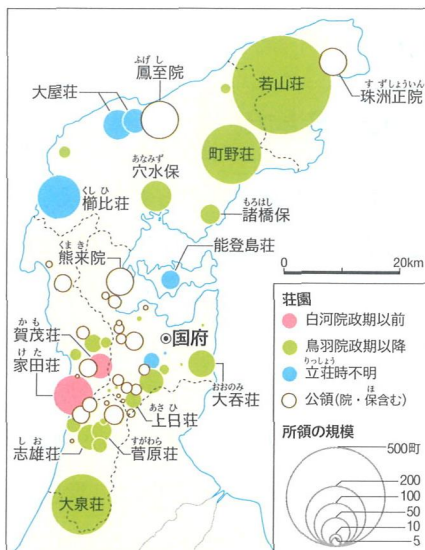
2 院政と平氏政権

院政期の社会

上皇の周囲には、富裕な受領や后妃・乳母の一族など院近臣^{いんのきんしん}と呼ばれる一団が形成され^②、上皇から荘園や収益の豊かな国を与えられた。とくに鳥羽上皇の時代になると、院の周辺に荘園の寄進が集中したばかりでなく、有力貴族や大寺院への荘園の寄進も増加した^③。また、不輸・不入の権をもつ荘園が一般化し、不入の権の内容も警察権の排除にまで拡大されて、荘園の独立性が強まった。

またこの頃には知行国の制度^④や、上皇自身が国の収益を握る院分国の制度が広まって、公領は上皇や知行国主・国司の私領のようになり、院政を支える経済的基盤となった。

大寺院も多くの荘園を所有し、武装した僧侶を僧兵^{そうへい}として組織し、国司と争い、神木や神輿を先頭に立てて朝廷に



① 白河天皇が造立した法勝寺や堀河天皇が造立した尊勝寺など、院政期に天皇家により造営された「勝」のつく6寺をいう。

Q 上皇は、どのようにして権力を強めたのだろうか。

② 院庁の職員である院司として上皇に仕えた近臣たちは、初めのうちは朝廷での官職はさほど高くなく、諸国の国司(受領)が多かった。

③ 上皇は、近親の女性を院と同じような待遇(女院)にして大量の荘園を与え、寺院に多くの荘園を寄進した。たとえば、鳥羽上皇が皇女八条院に伝えた荘園群(八条院領)は平安時代末に約100カ所、後白河上皇が長講堂に寄進した荘園群(長講堂領)は鎌倉時代初めに約90カ所にのぼり、それぞれ鎌倉時代の末期には大覚寺統・持明院統(→p.110)に継承され、その経済的基盤となった。

④ 上級貴族に知行国主として一国の支配権を与え、その国からの収益を取得させる制度。知行国主は子弟や近親者を国司に任じ、現地には目代を派遣して国の支配をおこなった。この制度は、貴族の俸禄支給が有名無実化したため、その経済的収益を確保する目的で生み出された。

能登国の荘園と公領 能登国の荘園と公領がいつ、どれだけ生まれたのかを能登国の大田文(→p.93注⑥)により記したものを。荘園は国府から遠くに、公領は近くに多いことがわかり、鳥羽院政期から荘園が増えていることもうかがえる。(井上光貞ほか編「日本歴史大系1」より作成)

飛躍的にのびしたのが、忠盛の子の平清盛である。

1156(保元元)年、鳥羽法皇が死去するとまもなく、かねて皇位継承をめぐり鳥羽法皇と対立していた崇徳上皇は、摂関家の継承を目指して兄の関白藤原忠通と争っていた左大臣藤原頼長と結んで、源為義・平忠正らの武士を集めた。これに対して、鳥羽法皇の立場を引き継いでいた後白河天皇は、忠通や院近臣の藤原通憲(信西)の進言により、平清盛や為義の子源義朝らの武士を動員し、上皇方を攻撃して破った。その結果、崇徳上皇は讃岐に

流され、為義らは処刑された(保元の乱)。

つづいて、院政を始めた後白河上皇の近臣間の対立から、1159(平治元)年には、清盛と結ぶ通憲に反感をいだいた近臣の1人藤原信頼が、源義朝と結んで兵をあげ、通憲を自殺に追い込んだ。だが、武力にまさる清盛によって信頼や義朝は滅ぼされ、義朝の子の頼朝は伊豆に流された(平治の乱)。

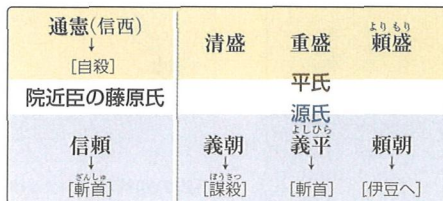
この2つの乱に動員された武士はわずかであったが、貴族社会内部の争いも武士の実力で解決されることが明らかとなり、武家の棟梁としての清盛の地位と権力は急速に高まった。

平氏政権

平治の乱後、清盛は後白河上皇を武力で支えて昇進をとげ、蓮華王院を造営するなどの奉仕をした結果、1167(仁安2)年には太政大臣となった。その子平重盛ら一族もみな高位高官にのぼり、勢威は並ぶものがなくなった。

天皇方	後白河 (弟)	関白忠通 (兄)	清盛 (甥)	義朝 (子)
上皇方	天皇家	藤原氏	平氏	源氏
	崇徳 (兄)	左大臣 頼長 (弟)	忠正 (叔父)	為義 (父)

保元の乱関係図



平治の乱関係図

Q▶ 保元・平治の乱ののち、平清盛が武家政権を築いたが、それはなぜだろうか。

Q▶ 平氏政権の政治とそれまでの貴族政治との違いは、どのような点にあるだろうか。



蓮華王院本堂内部 平清盛は後白河上皇の信任を得て、法住寺御所の近くに蓮華王院を造営した。本堂(三十三間堂)に1001体の千手観音像を安置するとともに、宝蔵には古今東西の宝物をおさめた。現在の本堂は鎌倉時代の再建。
みょうほういん
(妙法院、京都府)

が活発となり、12世紀に宋が北方の女真人^{じょしんじん}の建てた金^{きん}に圧迫されて
 南宋^{なんそう} 1127～1276 となってからは、さかんに貿易がおこなわれた。これに応じて清
 盛^{せい}は、摂津の^{おおわだのときり}大輪田泊^{だいりんたふく}（神戸市）を修築して、瀬戸内海航路の安全を
 はかり、宋商人の畿内への招来にもつとめて貿易を推進した^②。この
 清盛の積極的な対外政策の結果、宋船のもたらした多くの珍宝や宋
 銭^{せん}・書籍は、以後の日本の文化や経済に大きな影響を与え、貿易の利
 潤^{りゅん}は平氏政権の重要な経済的基盤となった。

院政期の文化

貴族文化は院政期に入ると、新たに台頭してきた
 武士や庶民とその背後にある地方文化を取り入れ

て、新鮮で豊かなものを生み出した。

後白河^{ごしろかわしようこう}上皇がみずから民間の流行歌謡である今様^{いまよう}を学んで『梁塵
 秘抄^{ひしょう}』を編んだことは、この時代の貴族と庶民の文化との深い関わり
 をよく示している。このほかに古代の歌謡から発達した催馬楽^{さいばら}や和漢
 の名句^{めいご}を吟じる朗詠^{ろうえい}も広まった。田楽^{でんがく}や猿楽^{さるがく}などの芸能は、庶民のみ
 ※1 ※2
 ならず、貴族のあいだにもおおいに流行し、祇園祭^{ぎおんまつり}などの御霊会^{ごりょうえ}や
 大寺院^{だいじゆん}の法会^{ほうえ}などで演じられた。 → p.66

また、インド・中国・日本の1000余りの説話を集めた『今昔物語集^{こんじやく}』
 には、武士や庶民の活動・生活の様子が描かれた。平将門^{たいらのまさかど}の乱を描
 いた『将門記^{しょうもんき}』に続いて、前九年合戦^{ぜんくねん}を描いた『陸奥話記^{むつわき}』などの初期
 の軍記物語が書かれ、後三年合戦^{ごさんねん}を描いた『後三年合戦絵巻^{ごさんねんがっせんえまき}』などが制
 作されたことも、この時代の貴族が地方の動きや武士・庶民の姿に関
 心をもっていたことを示している。 → p.77 → p.78 写真

これまでの物語文学とともに、『大鏡^{おおかがみ}』や『今鏡^{いまかがみ}』などの和文体のす



青磁鳳凰耳花生 宋(南宋)か
 ら輸入された陶磁器。
 (高さ33.6cm、和泉市久保惣記念美術
 館蔵、大阪府)

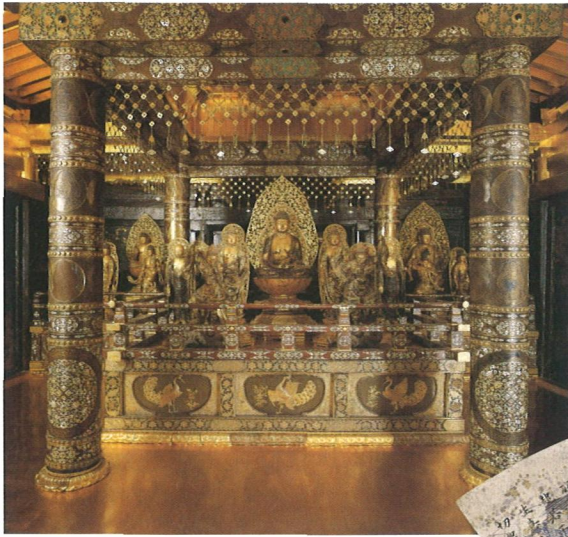
② 日宋貿易では、日本からは
 金・水銀・硫黄・木材・米・
 刀剣・漆器・扇などを輸出
 し、大陸からは宋銭をはじめ
 陶磁器・香料・薬品・書籍
 などを輸入したが、そのうち
 の香料・薬品類は、もともと
 は東南アジア産のものであっ
 た。

※1 田植えの時に豊作を祈る
 祭礼神事芸能

※2 奈良期に伝来した散学に
 由来する滑稽を主とした
 雑芸・歌曲



毛越寺庭園(左)と復元模型(上) 奥州藤原氏2代基衡^{もうつうじ}
 の創建で、3代秀衡の代に完成した。建物は中世に焼
 失したが、浄土式庭園の遺構はよく残っている。
 (模型：藤島亥治郎設計、平泉文化史館蔵、岩手県)



中尊寺金色堂内陣(岩手県)



富貴寺大堂 大分県くにおきの国東半島にある九州最古の阿弥陀堂建築で、浄土教の地方伝播でんぱを示す典型例。堂内には「来迎壁画」と定朝じやうちやうぢやう様阿弥陀如来坐像を有する。(大分県)



『扇面古写経』おうぎ 扇紙に大和絵で当時の風俗を描き、これに経文きやうもんをそえている。図は市の風景で、庶民の生活がしのばれる。(縦25.6cm、四天王寺蔵、大阪府)



『伴大納言絵巻』 燃え上がる応天門を描いた場面。(部分、出光美術館蔵、東京都)

ぐれた歴史物語が著されたのは、転換期に立って過去の歴史を振り返ろうとする、この時期の貴族の思想の表れである。

Q▶ 院政期の仏教文化には、どのような特色がみられるだろうか。

天皇家により大寺院がつくられる一方、寺院に所属しない聖ひじりや上人しやうなどと呼ばれた民間の布教者によって、浄土教の思想が全国に広がった。奥州おうしゅう藤原氏が建てた平泉のひらいずみ中尊寺金色堂ちゆうそんじこんじきどうや、陸奥のむつ白水しらみず阿弥陀堂あみだどう、豊後の富貴寺大堂など、地方豪族のつくった阿弥陀堂や浄土教美術の秀作が各地に残されている。平氏に信仰された安芸あきの厳いつく



厳島神社『平家納経』 平清盛は安芸の厳島神社を平家一門の氏神とした。清盛は一門の繁栄のために法華経などの写経を奉納した。(広島県)

『信貴山縁起絵巻』 12世紀の絵巻。命運という僧が鉢を飛ばして長者(地方豪族)の倉を信貴山まで運んだという話などを描く。動的な線描で庶民の生活や風俗を描く。(飛倉の巻、部分、朝護孫子寺蔵、奈良県)



しま
島神社には、豪華な『平家納経』が伝わっており、平氏の栄華と貴族性を物語っている。

絵と詞書を織りまぜて時間の進行を表現する絵巻物は、この時代には大和絵の手法が用いられて発展した。『源氏物語絵巻』は貴族の需要に応じて描かれ、『伴大納言絵巻』は応天門の変に取材し、朝廷の年中行事を描いた『年中行事絵巻』とともに、院政の舞台となった京都の姿を描いている。また『信貴山縁起絵巻』は聖の生き方や風景・人物をたくみに描き、『鳥獣人物戯画』は、動物を擬人化していきいきと描いている。こうした絵巻物や『扇面古写経』の下絵からは、この時代の地方社会や庶民の生活をうかがうことができる。

- ※1 吹抜屋台・引目鉤鼻の手法が用いられている。
- ※2 庶民の生活と風俗を伝えるとともに僧命運の奇行を述べた内容

第5章のまとめ

- 問1 院政の登場は、貴族社会にどのような影響を与えただろうか。また、その理由は何だろうか。
- 問2 摂関政治と院政には、どのような類似点と相違点があると考えられるだろうか。
- 問3 貴族政治の変容や武士の政治への関与などの観点から、中世の特徴について、古代とも比較して、問いを表現してみよう。

絵画から中世社会を探る

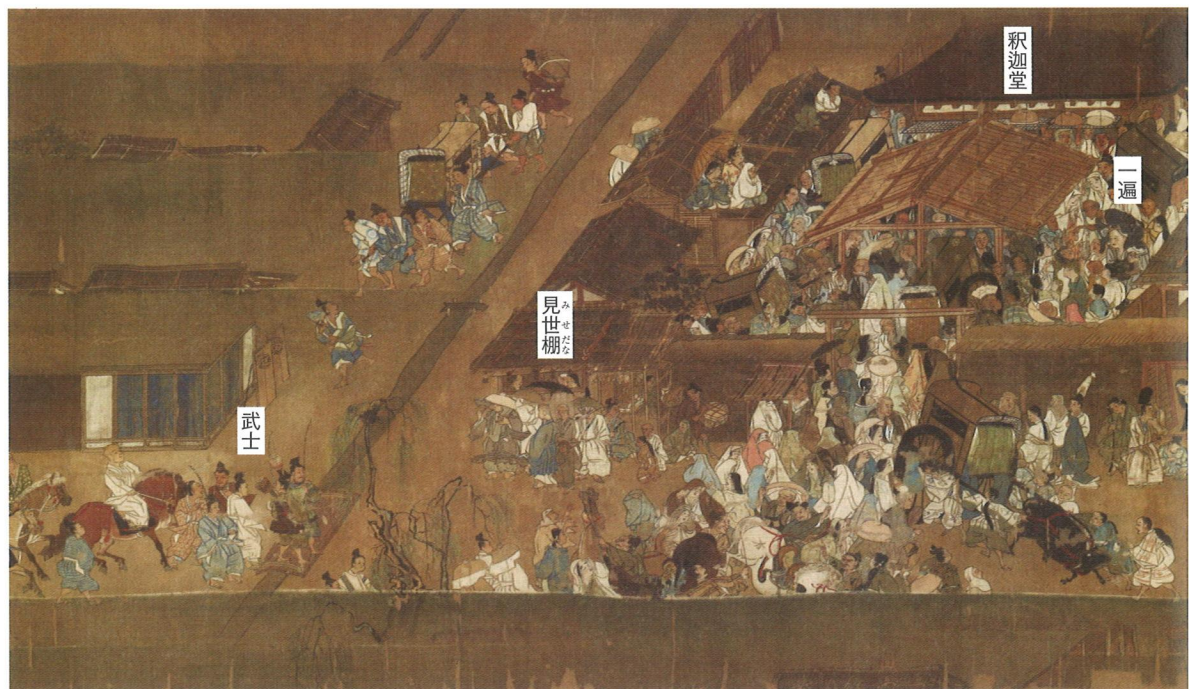
中世には絵画が多く制作されたので、それらをみてゆく
と人々の動きやものの見方がうかがえる。ときに声や喧騒
が伝わってくる。それぞれの絵画が何を目的にして描かれ
たのかを考えながら、目をこらし、人々の行動や背景とし
て描かれた風景に注目してみよう。

ここでは、中世に一貫して政治や文化の中心であった京
都を描いた作品を並べたので、比較して時代の推移を考え
てみよう。

『年中行事絵巻』(朝観行幸の図、住吉家模本、田中家蔵)

保元の乱(1156年)後、乱で荒れた都の再生をはかった後白河上皇(→p.81)
の命によって制作された、都とその周辺でおこなわれた年中行事を描く
絵巻である。場面は二条天皇が年頭のあいさつのため、父の後白河上
皇のいる法住寺御所に向かう行幸の様子が描かれている。

▶ 行列のゆく都の大路、それを見つめる町中の人々の視線、住んでいる家の様
子にも注目しよう。そのうえで、上皇がどうしてこの場面を描かせたのかを考え
たい。『年中行事絵巻』には、ほかにどのような場面が描かれたのであろうか。





八条坊門付近の
大路

大路に面する家々
各家の前には、
門松が立てられている



祇園社大鳥居

物見櫓

四国大橋

四国大橋

鴨川



詳しく
みてみよう!

一遍上人絵伝
(巻7)

『一遍上人絵伝』

(巻7、四 条 京 極 の釈迦堂の図、東京国立博物館蔵)

時宗を開いた一遍(→p.105)の生涯を14世紀初めに描いた絵巻である。各地を遊行しつゝ念仏を勧めていた一遍は、京都に入って熱狂的に迎えられた。

▶ 踊念仏がおこなわれるのはどのような場所で、どのような人々がどのような様子で集まっているのか注意してみたい。描かれている建物は何であるか、通りをゆくのはどのような人かについても考えてみよう。さらに、この場面の前後には何が描かれているかを調べてみよう。





『洛中洛外図屏風』

(右隻、部分、狩野永徳筆、米沢市(上杉博物館)蔵)

京都の中心部である洛中とその周辺部の洛外を、16世紀後半に描いた屏風絵である。京都の中心部の祭礼である祇園祭(→p.66注②、136)の山鉦巡行の行列が町中を進む場面を描いている。

▶ 同じ京都を描いた絵画であるのに、前の2つとは違って、ここでは屏風に描かれているのはなぜだろうか。屏風や絵巻をどうみていたのかに注目して、考えてみよう。

資料の伝来についても考えてみよう

歴史資料は、様々な変遷を経て現在に伝わっている。たとえば、ここで取り上げた『年中行事絵巻』は、後白河法皇により蓮華王院の宝蔵におさめられたが散逸してしまい、江戸時代に模写されたものが今に伝わっている。『一遍上人絵伝』は、現在、巻7のみ東京国立博物館に保管されているが、あとは清浄光寺にまもられて伝えられている。いたんだ箇所があり、近年修復された際に、後世に追筆されたことがわかっている。『洛中洛外図屏風』は、織田信長から上杉謙信へ贈られ、上杉氏に伝えられてきたといわれるもので、保存状態も良好であり、現在は山形県米沢市の上杉博物館に所蔵されている。

3つの絵にはいずれも都大路のにぎわいが描かれている。つぎのような点に着目して、中世の特徴について仮説を立ててみよう。

- ・ 商工業の発達
- ・ 様々な集団
- ・ 建物や通りの施設
- ・ 絵画が描かれた目的